

新型コロナウイルス感染症予防に対応した保健室の役割について

研究代表者：和歌山大学教育学部 本山 貢

共同研究者：和歌山大学教育学部附属小学校 上原愛加（養護教諭）

附属中学校 淵川由紀（養護教諭）

附属特別支援学校 鶴岡尚子（養護教諭）

和歌山市立雑賀崎小学校 森本孝子（養護教諭）

1. はじめに

学校現場は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の終息が見えないまま、今年度も学校の健康教育が徹底され感染予防に力を注ぐことになった。養護教諭は教職員との連携によって教育環境の整備や保健指導にあたるのが重要な職務である。さらに附属小学校、中学校、特別支援学校、さらには公立学校に勤務する養護教諭は、校種の違い等を踏まえ、連携して学校現場での感染症予防対策に専門家として実践的な力量を発揮することが求められている。令和3年度は、昨年度に引き続き長期化する感染症予防に対応した保健室の役割について、それぞれの校種で行った対応策を紹介する。

2. 附属小学校の取り組み

○新型コロナウイルスの取り組み内容

新型コロナウイルスの流行が収束の兆しを見せず、コロナ禍への慣れや感染予防対策への意識の薄れが見られていた。そのため、再度、感染予防対策を周知し徹底する必要がある。前年度より実施している対策は継続しつつ、今年度新たに児童保健委員会で取り組んだ取組を2つ報告する。

まず、オンライン集会の時間に全校児童に向けて感染予防対策についての動画を配信した。保健委員会の児童が、感染予防のためにどうすることが必要か考え、「手洗い・マスクの着用・3密を避ける」の3つをテーマにグループを分け、それぞれに動画を作成した(右図)。動画の作成や、異学年児童との交流にはタブレット端末を使用した。

次に、児童が普段の手洗いの際に使用する石けんのボトルに、保健委員会の児童が絵を描き装飾した。少しでも手洗いへの意識を向け、興味をもって楽しく実施できるように取り組んだ(右写真)。

グループごとの発表内容

(手洗い)・手洗いの重要性

- ・手洗いの歌のポーズの確認と練習

(マスク)・マスクをする理由

- ・熱中症に注意

→マスクを外したら喋らない

(3密)・避けてほしい密の状態の具体例

- ・換気扇を回す重要性



○取り組みの結果

今回の感染予防対策の結果、児童が対策を再確認することができたと考える。教員からではなく、児童から伝えることでより意識することにつながったと感じている。発表動画では、クイズ形式を取り入れたり例を実演したりして改善点を伝えたことで、言葉だけでは難しい低学年の児童にとってもイメージしやすい内容となった。また、動画作成の活動の中で、従来であれば各休憩時間を利用して児童が集まり動画等の作成をおこなっていたが、タブレット端末を使って取組を行ったことで、全員が一堂に集

まることを避け結果的に感染予防対策につながることができた。

手洗いのボトルの装飾については、手洗い場に設置したところ「これかわいい」「このキャラクター好きやからこの石けん使う」等の声が聞かれ、児童が興味をもっていることが分かった。手洗いの必要性は分かっているが、コロナ禍への慣れからか、何もせず手洗い場を通りすぎる児童も多くなってきていたが、この取組によって石けんボトルが目につき、手洗いを促進することができた。

○今後に向けて

コロナ禍が長引くにつれ、感染症に対しての慣れが出てきたり、感染予防対策がマンネリ化したりといった状況が顕著に見られるようになってきている。感染予防対策をきちんと実施できていない児童もおり、学校での感染拡大を防ぐという観点では多くの課題もある。未だ油断できる状況ではないことを、子ども大人も再度意識しなければならない。その中で、多くの我慢を強いられている児童の精神的な面でのケアも考える必要がある。今回の取組を通して、感染予防対策のマンネリ化を防ぐことで、子どもたちに刺激となり、有効なことが分かった。児童が少しでも楽な気持ちで感染予防対策を行えるような工夫を今後も続けていきたい。

3. 附属中学校の感染症予防対策（コロナ関係）について

令和2年度、附属中学校保健室の感染予防の取り組みとして、「検温」と「消毒」について述べ、どちらの取り組みも初期の緊張感から現在のマンネリ化、油断といった状態に変化してきたと報告したところである。この傾向は、感染者数が増え、世の中の緊張感が増している時でさえ大きな変化なく現在に至っているように感じている。

令和3年度の学校としての新型コロナウイルス感染予防の対応を見つめたところ、「新しい生活様式」個々の励行促進を念頭としながらも、一貫して・体調不良者を集団の中に入れず・手洗い、換気、マスク着用の徹底 といった2点が最も重要であると考えている。そうした中、保健室の役割については、正しい情報の収集と伝達、衛生用品等の準備といった教師集団側への補佐の側面と生徒への指導や委員会活動の支援など生徒側に働きかける側面があり、どちらについても保健室だけが実施したり、周りに強制するのではなく、全体の取組に寄り添い、支援していく主体として活動していくことが大切だと考えている。

今回も「検温」と「消毒」をキーワードとして個々の事例を整理し、一考察を報告したい。

・「検温」について

当初から、自宅での検温結果をオンライン入力する方法が取られ、一定の成果を上げている。ただ、あくまで自己申告であることの信頼性と、遅刻者と未入力者の把握のため紙ベースで空欄チェックしたうえでの保存といったデータのみでの活用ができていないところが課題と言える。特に、未入力の問題は、一定の生徒に起こりがちで、そのような事態に気づいた保健委員会の生徒は自発的な呼びかけ活動を実施してくれている。保健室からは、罰則的な発言や、ピンポイントで名指しする注意などはしないように指導しながら見守っている。検温の徹底は、健康観察の確立といった面でこれまでも自己判断で登校を決定していたものが、より厳格化された感を受けている。今後コロナが収束した後も検温は、手洗い・換気・マスク着用とともに続けなければならないから、保健室はその啓発と資料保管が役割だと考えている。

・「消毒」について

衛生用品の調達、分担、管理といった意味で保健室が窓口となることが役割だと考える。当初、アルコールや手洗い石鹸の不足と代替品情報の氾濫などの混乱の中、学校全体の調達に関して大きな金額に関わらねばならない苦労もあったが、今年度は、価格の安定、良質なものの流通、使用量の把握などができてきた。今後も、国、文科省、県、市からの明確な情報が欲しいところであるが、そうした意味では、学校に配布されている「簡易抗原キット」の取り扱いには一抹の不安が感じられる。

保健室の取組として、タッパー単位でアルコールを含ませた綿花を配付し、共有教材等の消毒に使用してもらったことは有効だったと考える。ただしその綿花活用も最近は減少傾向にあるように感じている。

昨年度、教員によるトイレ清掃を実施したこともあったが、基本的には体調不良者が登校を控え、様々な時点での手洗いの励行によって対応可能と判断し、現在はトイレの清掃に特化した取組は実施していない。同じような視点で言えば、こまめな手洗いに勝るものはなく、アルコール消毒は手洗いを補完するものであるといった、正しい知識を理解したうえでの対応を啓発していきたい。

現在、小さな活動ではあるが、保健委員をはじめ、生徒の活動として「手洗い石鹸のチェック」や、「コロナ感染者数の報告（放送）」を続けている。学校が、余計な情報に振り回されることなく、今後も続けなければならない新しい生活様式が負担にならないよう、習慣化されることを保健室から願っている。



4. 附属特別支援学校での感染症対策の取り組みについて

○令和3年度の学校の状況

昨年度から引き続き、登校前の家庭での検温及び健康観察、登校時のサーモグラフィによる検温、給食時の一方向を向いた静かな食事などの基本的な感染症対策を行っている。校外学習や調理実習については、制限はあるものの、できるだけ実施できるよう学校保健員会で協議している。

既に確立されている感染症対策は、教師と子どもたちにとって日常のものとなっており、学校生活において表面上は大きな混乱は見られない。昨年度は、正体の分からない新型コロナウイルスへの不安を口にする子どもや保護者もいた。今年になってワクチン接種が始まった時には、接種に関する相談を数件、保護者から受けた。しかしその後は、ワクチンやウイルス感染への不安などを直接保健室で聞くことはない。落ち着いたように見える子どもや保護者の様子は、感染症対策の定着といえる面と、「マンネリ化」と捉えられる面があると思われる。

感染状況に応じて、必要な感染対策を継続、注意喚起をすることはもちろん必要だが、その中で一層配慮したいのは子どもたちの心身の健康状態である。知的障害のある本校の子どもたちが、自ら心身のストレスを適切に訴えることは困難である。しかし、子どもたちの心身の状態を把握し、早期に対応することは養護教諭の責務である。

ここでは、これまで注目されがちであった、具体的な感染症対策とは違った保健室の役割として、心身の健康課題の把握について考えられることを述べる。具体的な問題事例があるわけではないが、継続す

る感染対策の中での、子どもたちの心身の健康状態を捉える視点としてもおきたいことである。

○心身の健康状態を把握することの重要性

学校全体としての感染症対策は、学校保健員会で管理職や保健主事が中心となって構築される体制がある。しかし、ワクチン接種が開始された時に、保護者から保健室に問い合わせがあったように、今後の社会や学校において、感染対策に大きな動きが見られるときには、保護者の不安が増すことが予想される。そのような時、保護者の不安は子どもにも影響を及ぼし得るだろう。感染症対策における社会的な動きに関しては、常に新しい情報を得ておくことで、保護者の不安や疑問に答えられる準備をしておきたい。そして、家庭の経済状況や保護者の心身の状態から影響を受ける子どもたちの状態を注意深く見守りたい。子どもたち自身がそういったことから影響を受けていることを自覚したり、自らしんどさを訴えたりすることは困難であると思われる。しかしながら、新型コロナウイルスの影響による家庭の状況や、子どもたちへの影響を把握するような体制があるわけでもない。だからこそ、養護教諭が一人ひとりの少しの変化に敏感であり、家庭状況や表出されないしんどさも想像することで、適切な子どもへの支援に繋がると考える。

○課題は家庭との連携の方法

新型コロナウイルスが流行する以前には、保護者の会議や行事の際に、養護教諭と保護者が、直接話ができるような機会もあった。世間話から家庭での子どもの話になり、保護者から相談を受けることで保健室での指導に繋がることもあった。しかし保護者と養護教諭が出会う機会が少なくなったと感じる。感染対策が必要な中、保護者とのコミュニケーションの機会をいかに確保するかが課題である。

例年、ほけんだよりを毎月発行していたが、今年度はほとんどできていない。今後は保健室からの正しい情報と、養護教諭の人柄が伝わるほけんだよりの作成を心掛けることで、保護者との距離を縮める一助にしていきたい。

感染症対策は今後も求められるだろう。そのような中、子どもたちの心身の健康にどのような影響が出てくるのかを長期的に、注意深く見ていきたいと考える。

5. 和歌山市立雑賀崎小学校における感染症予防に対応した保健室の役割について

(1) 取り組み

① 新型コロナウイルス感染症予防対策のスローガンを更新

昨年度設定したものを「みんなで命を守ろう ～自分のため、まわりの人のために、今自分ができていることを考えてすすんで行動しよう～」に更新し発信した。

周囲との繋がりを大事にして未来を見据え、今（現実）を積み重ねることを意識して行動する子供の育成をめざした。それにより、昨年度よりも更に、個から集団としての高まりに意識を向けて生活することが期待できると考えた。〔自ら意思決定・行動選択する力、他者とかわる力〕

② 児童保健委員会の啓発活動を通して

児童保健委員会では、隣接する市立雑賀崎幼稚園を訪問し、園児たちに健康生活に関する啓発活動を行っている。新型コロナウイルス感染症の流行で訪問が危ぶまれたが、感染症予防対策を講じながら実施

した。

保健委員の児童は、この活動の目標を「園児たちに、体を清潔にしてウイルスから身を守ることの大切さをわかってもらう」と設定し、感染症予防のための新しい生活様式に関する事項の伝達と、絵本の読み聞かせに取り組んだ。子供たちは計画段階から、この啓発活動が成功して、目標が達成できたときの自分たちや園児たちの姿と想いの未来像を描き、一人一人主体的に取り組むことができていた。伝える内容に関することを調べ、絵本選びを進める中で、園児たちに分かりやすい言葉遣いを考えて、小道具やポスターを作って視覚化するなど細部にわたり工夫し、互いに協力し合っていた。人前での発表が苦手な子もいたが、訪問当日はしっかりと発表し、役割を果たすことができた。この児童は後に「最初はできるか不安で嫌だったけれど、最後までやって良かった。できたことが嬉しかった。」と、笑顔で感想を話してくれた。他の子供たちも園児の静かに真剣な眼差しで聞いて喜んでくれている姿に、達成感と充実感を味わっていた。〔自己有用感、自己肯定感、他者とかかわる力〕



③ 学校保健委員会開催と活性化を図る

学校保健委員会（和歌山県は学校保健安全委員会と称す）は、学校における健康課題に対処するために、学校・家庭・地域が協議し健康づくりを推進する組織であり、学校保健安全法で学校保健計画に規定すべき事項として位置付けられている。

今年度は12月に、「ぼく・私ができる感染症予防と冬の健康管理を考えよう」をテーマに開催した。参加者は5・6年児童、学校三師、保護者、管理職、保健主事、5・6年担任、養護教諭とした。

このテーマで進めるにあたり、計画段階から2点の柱をもって取り組んだ。1点目は長期的な視点を持つこと。2点目は5・6年児童の学びを全校に拡げることである。

1点目は、新型コロナウイルス感染症だけでなく、例年冬に流行が予想されている風邪・インフルエンザ・感染性胃腸炎についても、この会で得たことをベースに予防対策を講じて、12月以降3学期の健康管理をしていくことをめざした。

2点目の5・6年生が参加するめあてを「学んだことを全校に伝えて、雑賀崎小学校のみんなで元気にすごそう」と設定した。事前に学校三師の先生方にテーマに沿った内容の質問をし、当日回答を頂く形式で協議を進めた。質問したい項目が多数挙がり、学校三師の先生方もそれに応えようと専門的な立場から回答をくださった。学校三師の先生方からは「タイムリーなテーマで有意義であった。」「子供たちが熱心に聞き、学んでいる姿が印象的だった。」「この後、下級生に伝えて全校児童で冬を元気にすごす計画はとても良い。上級生としてすばらしい姿で、頑張ってもらいたい。」との感想を頂いた。その後、5・6年担任と相談しながら、5・6年児童を中心に児童代表委員会と児童保健委員会も合同で、感染症予防と冬の健康な生活について啓発活動を計画し進めている。子供たちは下級生にも分かりやすく伝えるために、感染症について更に自己学習をしたり、発表の工夫をしたりするなど、上級生・代表委員・保健委員として一人一人自覚をもって臨んでいる。〔心身の健康に関する知識・技能、他者とかかわる力、自己有用感〕

(2) 取り組みの結果及び考察

新型コロナウイルス感染症予防のための新しい生活様式が、日常の生活様式として浸透しつつある。一方で、新変異株ウイルスにより、感染症予防対策の変更や強化が余儀なくされる状況の中で、新しい生活様式と健康管理のモチベーションを上げていくための学校保健活動が必要である。

そこで、感染症予防対策の目標を全校で共有するために、取り組み①は昨年度よりも「まわりの人のために」と拡げて発信した。学校教育活動のあらゆる場で、これを核に計画実施することで、学校全体の感染症予防の意識が高まり、今何をすべきかの判断力と行動化が強化された。そして、個と集団の関係性がプラスに作用し、地域や関係機関の協力と理解を得ることができ、有効であったと推察される。

②は昨年度の取り組みであるが、その時の幼稚園年長児が今年度入学してきている。その1年生を見ていると、感染症予防の指導時にこの活動を想起する発言があったり、保健委員会児童に安心感を抱いたりしている様子が見られる。入学後の健康生活や子供同士の関係性に見通しを持ち、活かされる取り組みとして有効であり、継続していきたい。

取り組み③は現在進行中であるが、学校保健委員会参加者が各々の立場で、感染症予防と冬の健康について再考し、実生活で活かすことに繋がった。特に、高学年を中心に全校が一丸となって冬を健康に過ごすための活動に拡大しているのは確かである。これは小規模校である本校の特色の一つ、高学年のモデリングが生かされ、次世代に引き継がれていくものだと考えられる。

今後も子供たち一人一人が、みんなで命を守るために主体的に考え、行動選択して実践していく力を身につけて、感染症予防をしていくことが必要である。そのために、保護者・地域・学校三師をはじめとする関係機関との連携を図り、チーム学校として継続発展できるように保健室を機能させて学校保健教育に取り組んでいきたい。

6. まとめ

令和3年度は昨年度に引き続き、「感染症予防に対応した保健室の役割について」をテーマにして大学、附属3校、公立学校の3者間で共同研究を実施した。昨年度は、新型コロナウイルス感染症の対応に追われ、本来実施しななければならないルーチン業務に過剰な労力を求められた1年であったと考える。1年間を通じて、コロナ対応に苦慮したがそれぞれの校種で適切な感染症予防ができ、いずれの学校でも感染者を未然に防ぐことができた。養護教諭の役割としては、児童生徒の健康課題を的確に早期発見し、課題に応じた支援を行うことのみならず、全ての児童生徒が生涯にわたって健康な生活を送るために必要な力を身に付け、他の教職員と連携しつつ日常的に行うことが重要である。また家庭・地域と連携が重要である。こうしたことを踏まえ、今年度の対応を検討した。いつ終息するかしれないコロナ対応で感染症予防に対応して行った保健室の取り組みは、マンネリ化した対応や感染リスクへの危機感が児童・生徒のみならず教職員もが薄れている感じがあった。今後の学校内全体で取り組むべき新たな対応策の課題がみえてきたような気がする。今後、養護教諭は専門職としての力量を発揮し、「チームとしての学校」の主軸となり、リーダーシップを発揮して感染予防に取り組むことが必要であると考え。また今後、新種のコロナウイルスの感染予防対策や新たな感染症情報を高いレベルで習得し、具体的で効果的な方法の情報共有が不可欠であると考え。